

新海底軍艦～アルス・ノヴァ～

あーくこさいん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

海底軍艦『羅號』

大和型四番艦として建造され、太平洋戦争末期にアメリカの万能戦艦との相打ちで沈められた・・・

そして時は流れて、西暦2048年――
突如現れた『霧の艦隊』によつて人類は海洋から駆逐され、衰退への道を転がり落ちていった。

だが、地上を制圧しようと目論む第三勢力『レムリア帝国』が霧をも圧倒する超兵器『万能戦艦』を用いて活動を開始した。

その時、羅號は甦る。

戦争に勝つためではなく、全人類を守る為――

目次

プロローグ	1
第一章 始動編 羅號復活	
第1話 出会い	5
第2話 古の記憶	9
第3話 復活	13
第4話 予兆	17
第5話 遭遇戦	21
第6話 再会	27
第7話 再戦	34
第8話 休息	43
第9話 新たなる航路(たびじ)	50
第二章 激動編 明かされた真実	
第10話 硫黄島	60
第11話 帝国の事情	68

プロローグ

ー西暦1945年8月6日ー

日本に原爆が落ちたその日、太平洋では誰にも知られることのない死闘が繰り広げられていた。

ドオオン！ ドオオン！ ドオオン！

太平洋に砲撃音が木霊する。

そこには二隻の軍艦が戦っていた。

一隻は艦橋と煙突部が大和型のものだった。

だが、兵装では従来の大和型を凌ぐものだった。

主砲は大和型の特徴である三連装砲ではなく四連装砲、しかも46cmを上回る大口徑砲だった。

そして、何よりこの戦艦が異質なのは艦首に付いている螺旋状の掘削機械『ドリル』を搭載していることだった。

もう一隻はアメリカ戦艦の艦橋に見るからに大きい煙突部に八本の太いパイプが接続されており、主砲はアイオワ級と同じ16インチ砲だった。

そしてこの艦も艦首に二本のドリルを装備していた。

今戦っている二隻の軍艦は大日本帝国海軍が建造した万能戦艦『羅號』とアメリカ合衆国海軍が建造した万能戦艦『モンタナ』だった。

その二隻は互いの主砲を撃ち合い、船体の各所に砲弾の直撃による穴が空き損傷が激しい中、『羅號』に動きがあった。

なんと艦首のドリルが回転し、そのままモンタナに突っ込んだのだ。

モンタナも慌てて羅號を止めようとするが、お構いなしに突撃し遂に

ズガアアアアアアン!!

大きな音を立ててモンタナの右舷前方にドリルが直撃し、モンタナは大破した。

もちろん羅號もただでは済まなかった。

だが、次の瞬間

ズドオオオオオン!!

羅號の船体各所から爆発が起きた。

そう、羅號はモンタナに対して自滅覚悟の相打ちで沈めるつもりだったのだ。

その後、音を立てながら二隻とも沈んでしまった。

「浸水止まりません!もう沈みます!」

「艦長、本艦はこれまでであります。脱出の用意を!」

「あと一人乗せれます!」

「副長、君が乗れ。」

「そんな!艦長が乗ってください!」

「いや、この艦を自沈させる形で相打ちを選んだ。その責任は私が取る。君達は生き延びろ!!」

「艦長!」

内火艇が発進し、艦長は艦と運命を共にすることになった。

「……この艦を『奴ら』の侵略に使わせはしない。」

男は胸のポケットから一枚の写真を取り出す。

そこには一組の男女が写っていた。

「すまない、富子。お腹の子を見れそうに無い……」

次の瞬間浸水し、やがて男を飲み込んだ。

そのまま羅號は沈んだ。

そして時は流れ西暦2039年――

温暖化の影響により地上の版図を大きく失った人類に、突如現れた『霧の艦隊』によりシーレーンや海底ケーブル、通信網も遮断され、人類は孤立し内紛まで起こる有様だった。

千早群像と仲間達が乗り込む霧の潜水艦イ401が世界に風穴を開けようと奮闘している中、西暦2048年になっても世界は大きく変わらなかった。

だが、人類はともかく霧の連中も知る由もなかった。

地上の制圧を目論む『第三勢力』が活動を開始した・・・

いや、この時まで奴らは暗躍していたことを。

「・・・万能戦艦の様子は？」

「万能戦艦『モンタナ』『インペロ』はそれぞれ太平洋、インド洋へと派遣、『インヴェインシブル』『ガスコーニュ』『ソビエツキー・ソユーズ』『フリードリヒ・デア・グロッセ』は改修作業を90%まで完了、まもなく戦線に投入出来ます。」

「・・・建造中の二隻はどうだ？」

「はっ、『第一号艦』は50%、『第二号艦』は30%の工程が完了。まだ時間はかかりますが順調です。」

「・・・通常艦艇の建造はどうなっている？」

「A型潜水艦、B型潜水艦、C型潜水艦はそれぞれ目標の74%、51%、39%とおおむね順調です。」

「そうか、ところで・・・『羅號』は発見できたか？」

「それが・・・羅號の沈没地点をくまなく調べたのですが、それらしい残骸は発見できませんでした。」

「・・・そうか。引き続き搜索せよ。」

「はっ」

そう言うと男は不敵な笑みを浮かべた。

海底に一隻の戦艦があった。

それは大和型の艦橋に四連装砲、艦首ドリルを装備した戦艦だっ

た。

その艦内に白衣を着た女性と6人の男女がいた。

「……遂に恐れていたことが起きたわね。」

白衣を着た女性は言った。

恐れていたこと……それは彼女の祖国『レムリア帝国』が地上制
圧の為に動き始めたことだった。

「有坂君、準備はいい?」

「大丈夫です!他のみんなも準備が完了しています!」

「そう、ならいいわ。」

今度は6人の男女のリーダーである男性が準備が整ったことを告
げる。

「これより本艦は慣熟航海を終えた後、『蒼き鋼』と合流し共に風穴を
開ける!海底軍艦『羅號』発進!!」

物語はここから始まる……

第一章 始動編 羅號復活

第1話 出会い

―西暦2048年 海洋技術総合学院―

羅號に乗り込む一ヶ月前――

一人の学生がつまらなさそうな表情をしながら、講義を受けていた。

その学生の名は有坂鋼。

つまらなさそうな表情をしていたのは、二年前に旅立った親友のことを思い浮かべていたからだ。

(群像・・・今頃どうしているのかな・・・)

そう考えていると、横からデコピンが飛んできた。

「痛ッ」

「こーら、何ボサツとしているのよ。」

そこにいたのは二年前に旅立った親友である千早群像の幼馴染である天羽琴乃の姿があつた。

「いてて、天羽さん・・・」

「もう、また群像くんの考えているでしょ。群像くん達、海に出て『霧の艦隊』相手に戦っているわ。私も気になるけど、切り替えた方がいいわよ。」

「うん・・・」

その後チャイムが鳴り、二人は食堂に向かった。

「日替わりでお願いします。」

「私も。」

定食メニューの乗ったトレーを持って、いつも通りのメンバーを探す。

「おっ、いたいた。こっちこっちー!」

「席とっておきましたよ。」

そこには四人の男女がいた。

その内の二人、響真瑠璃と月野凜が二人を呼んでいた。

「ありがとう響さん、月野さん。」

「まったく、少し遅くないか？」

「ははは、ごめん。」

「とりあえず食べますよ。」

「二「いただきます。」」

花島大介と田ヶ谷昂がそう言うのと六人は昼食を食べ始める。

「そーいや、アイツ今頃どうしているんかな？」

「アイツって・・・群像のこと？」

「そういえば今頃どうしているでしょうか・・・？」

「あれから二年か・・・」

有坂はそう言うのと天を仰いだ。

親友である千早群像は霧によつて衰退していく世界をただ見ているのが我慢出来なくなつて霧の潜水艦イ401と他のクルーと共に海に出たのだろう。

有坂鋼はそれをただ見届けることしか出来なかつた。

有坂自身も霧によつて唯一の家族である父親が死んでしまった為、群像は有坂が霧を恨んでいると思つていて誘わなかつたのだろうと考へていた。

確かに有坂の父親は霧との戦いで命を落としたが、有坂自身は根が善人であるため霧を恨むに恨めなかつた。

また、彼は霧の行動について疑問を持つていた。

もし霧が人類を滅ぼす存在であれば、陸地を攻撃する方が手っ取り早いのに、海上封鎖を行い続ける行動に矛盾を感じていたのだ。

だが、群像とはこの閉塞した世界に風穴を開けようつて誓い合つた為この二年間味気ない毎日を送つていた。

午後の講義を終えて帰るときに今日もあの場所に行く。

横須賀近郊にある小高い丘であり、そこでは横須賀軍港が一望できる。

そう、二年前ここから海に出て行く群像を見届けていた。

しかし、その日は丘の上に白衣を着た女性がいた。

「あの、貴方は・・・」

そう言うとその女性は振り返った。

茶髪のサイドテールに青い瞳をしていた。

「私はアネット。貴方は？」

「ああ、僕は有坂鋼。」

「そういえば・・・貴方はどうしてここに来たの？」

「えっ、ああ、海が好きだからこうやって毎日眺めるのが日課になって
いるんだ。そういえば、アネットさんも海が好きなの？」

「ええ、遠くから引越して来たけど私も海を眺めるのは好きよ。」

それ以来、有坂とアネットはこの丘で会い毎日話すようになった。
それから一週間経った頃、アネットがこう切り出した。

「有坂君、初めて会ったあの時、海が好きだからって言ったよね？」

「うん。それがどうしたの？」

「・・・あなた、それとは別の理由があるよね？」

「えっ?」

「だって、あの時海を目の前にしていたのに嬉しそうな顔じゃなかつ
たから、何か理由があるんじゃないかなって・・・」

「・・・アネットさん、鋭いですね。確かに海が好きなのも理由ですが、
他にも理由があります。」

そう言うのと彼は語った。

閉塞した世界に風穴を開けようと意気込んだ親友との誓い、二年前
の別れ、親友が奮闘している中何もできない状況での葛藤、霧の行動
に疑問を持っていることなどすべて打ち明けた。

「・・・それなら群像達に会えたら何したい？」

「そうだな・・・まず、取り敢えず聞きたいことをすべて聞いた後、誓
い合った仲だから一緒に戦いたいって言うかな。もちろん出来れば
だけど・・・」

「合格よ。」

「・・・えっ?」

「貴方なら艦長として『羅號』を預けられるわ。」

有坂はアネットの言っている意味が分からず、

「えっと、アネットさん?」

「・・・先に見せた方が早いわね。」

そう言うとアネットの姿が変わった。

白衣から何やら神秘的な服装になった。

あまりの綺麗さに有坂は思わず見惚れてしまった。

「貴方は・・・」

「改めて紹介するわ。私は旧レムリア王国第一王女『アネット』イコン『エピファネス』有坂君、どうか私の祖国を・・・世界を救って。」

第2話 古の記憶

「なっ……」

有坂はアネットの正体に驚きを隠せなかった。

「レムリア……王国？」

「分かりやすく言うなら太古の昔に栄えて一度滅んでしまった文明……と言えば分かるかな？」

「それって、アトランティスとかムウとかそういう感じ？」

「ええ、別名レムリア文明と言うわ。」

「そういうえば、さつき『旧』レムリア王国っていつてたけど今は違うの？」

「……今は『レムリア帝国』と名を変えているわ。」

「……詳しく教えてくれない？」

「分かったわ。まず、『レムリア人』について説明するわね。」

そう言うときアネットは説明を始めた。

まず『レムリア人』について地上人と同じ人型生命体だが、違う所をまとめると

・血が白い

・炭素と珪素で構成されている言わば『ハイブリッド生物』

・元はアメーバ状の珪素生物で、隕石に付着し地球に衝突したことにより地球に來訪、10万年前まで休眠していた

・10万年の年月を掛けた進化の過程でホモ・サピエンスの死体を取り込んだことにより人型の骨格と炭素の生成を覚えた為今のような形になった

・基本的に脳の機能が地上人よりも発達しており、特に『上位種』という個体は脳の発達度が凄まじく身体がそれに適応している為、長寿であり他の個体を統率できる

・その発達した脳で地上人よりも科学技術を発達させた

・地空人には互いの存在を知覚出来る能力がある（感応力という）

そのレムリア人が北極に存在した大陸で形成した文明、それが『レムリア文明』だった。

その超古代文明はより発達した科学技術により繁栄したが、一万二千年前に悲劇が訪れた。

当時、レムリア文明だけでなくムウ帝国とアトランティス帝国が存在していたのだが、そのムウ帝国とアトランティス帝国との全面戦争に巻き込まれたのだ。

10年間続いた戦争によってムウ帝国とアトランティス帝国は滅び、レムリア王国は辛うじて滅亡を免れたが5億人程いた人口も300万人程まで減ってしまった。

さらに悲劇は続く。

戦争終結から5年後に大規模な地殻変動が起き、その結果北極大陸が沈み人口も1万人まで減少した。

だが、運良く地下空洞に閉じ込められた生き残りはそこに都市を作り、一旦休眠状態に入った。

「・・・そして1910年頃に目覚めたわ。その後、必要最低限の軍備を整えて地上人とコンタクトを取ろうとしたけど・・・」

「けど?」

「地上人との交流を巡って『共存派』と『制圧派』・・・地上人と対等な立場で接するか、武力で制圧・支配するかで派閥争いが起きたの。」

「それでアネットは、どこの派閥に?」

「私の父、コルドバ国王は『共存派』のリーダーだわ。父自身も地上人との戦力差が開きすぎていることを分かっていたから『制圧派』の面々を説得していたのだけど・・・」

アネットは意を決して「あの時」のことを話す。

それは1930年のことだった。

突如制圧派の一人である『ゼノン・タイタニア』が他の制圧派の幹部を粛清した後、クーデターを起こした。

国軍の指揮権は既にゼノンが握っており、国王側については近衛隊のみだった。

王宮は襲撃され国王やその側近達は死亡、生き残ったアネットはその双子の姉であるアプトゥーと共に近衛隊によって潜水艦『ブルーノア』があるドックまで避難した。

だが、既にゼノン率いる国軍がドックに襲いかかった。

アプトゥーはアネットだけでも逃すために殿を務めて逃すことに成功した。

アネットはしばらくの間潜伏していたが、ブルーノアのデータベースに父が調査した制圧派の計画があった。

その計画はレムリア文明のテクノロジーの一つ『グラビティ・エンジン重力炉』を地上の列強各国に渡して戦艦を作らせて、完成した後遠隔操作して自分達の兵器として使うものだった。

アネットは居ても立っても居られず、地理的に近かった日本に向かった。

「列強各国によって作られたラ級戦艦は7隻、その内の1隻が日本が建造した大和型四番艦『羅號』。その艦長の名は『日向真鉄』貴方の祖父をあたる人よ。」

「なっ!?!僕のおじいちゃん!?!」

有坂は驚いた。

何故なら有坂の祖父は戦争末期に軍艦の艦長を務めていて戦死したと聞いたが、その軍艦の艦名が不明だったのだ。

「私は建造中のドックに向かいその関係者・・・艦長達に会ったわ。最初は警戒されていたのだけれど、艦長が取り直してくれたから真相を伝えたわ。その後羅號の遠隔操作装置を解除したけど、私は休眠カプセルに入り休眠したわ。」

「どうして?..」

「二万年以上休眠していたから身体に不調をきたしていたの。だから一度休眠して調整する必要があったのよ。」

「なるほど。」

「けど・・・羅號が完成し1945年8月6日に出撃、そのままアメリカのラ級戦艦『モンタナ』に遭遇して戦闘の末相打ちの形で沈んだ

の。」

「……!!」

「私が再び目覚めたのは1954年、万が一に備えて搭載した自己修復機能である程度の航行が出来るようになったけど艦長は死亡、後から分かった事だけど脱出した乗組員達は内火艇諸共帝国の潜水艦により沈められたの……」

「……」

有坂は言葉を失う。

羅號の乗組員達は艦長を含めて悲惨な最期を遂げているのだ。

「帝国の手に落ちないようにとりあえず羅號を日本海に隠し、帝国の地上制圧に備えて羅號の修理・改修を続けながら帝国の動向を探っていたの。そして今、羅號の改修を終えて乗組員を探していた所。」

アネットは改めて言う。

「有坂君、羅號の艦長をやってくれる?もちろん強制はしないわ。何故なら帝国の戦力はあなた達が戦っている霧をも凌ぐ軍事力・科学力を備えているの。だから命の保障はないわ。それでも、やってくれる?」

アネットは頭を下げる。

有坂は考えた後、答えを出した。

「……アネットさん。僕、やるよ。」

「……えっ?」

「親友と世界に風穴を開けようと誓い合ったんだ。親友が奮闘しているのに自分は何も出来ずにいるのは耐えられないんだ。だから、それが危険な道でも僕はやるよ。」

「……分かった。貴方の意思を尊重するわ。それでは……」

そう言うとき彼女はハンドベルトコンピュータに酷似した装置を操作すると、緑色のサークルが現れ潜水艦が実体化した。

「貴方には羅號艦長としてやってもらいたいことがあるわ。」

第3話 復活

羅號の艦長になる事を決めてから二週間、有坂は二つの課題が課せられていた。

一つは潜水艦『ブルーノア』を用いた特訓。

帝国に発見されない為に羅號本体は日本海大和堆におり、ブルーノアを用いて特訓を行った。

水上戦、水中戦、空中戦のシミュレーション、霧の艦艇はもちろんレムリア帝国の潜水艦、空中艦との戦闘シミュレーション、そして今現在判明しているラ級戦艦の対策及びシミュレーションを行った。

もう一つは羅號の乗組員の確保。

艦長の他にも副長、火器管制担当、操舵・航海担当、ソナー・レーダー担当、機関・メカニック担当と6人必要だった。

その為、有坂が通っている学院の学生からスカウトしなければならなかった。

有坂は残りの5人を決めていた。

ある日、食堂で昼食を食べていると、天羽がこう切り出した。

「有坂くん、何かあったの？」

「何かって何？」

「いや、最近ボーツとしなくなったのと帰るのが早い気がするの。」

「そういえばそうですね。」

「えっ、何々気になる！」

「お前まさか彼女出来たりして……」

「ううん、そんな事じゃないけど……」

有坂は少し間を置いて、

「あの、みんなちよつといいかな？」

「ん？どうしたの？」

「放課後、僕がいつも訪れている丘に来てくれないかな？そこで大事な話があるんだ。」

突然のことに5人は困惑するが、

「・・・ええ、分かったわ。みんなもいいでしょ。」

「えっ、ああ、いいけど・・・」

「じゃあ、また放課後で。」

有坂達は一旦解散した。

放課後、有坂達はいつもの丘に行き、そこでアネットに会った。

(ちよ、ちよっと！あの人誰!?)

(まさか彼女!?)

(綺麗・・・)

(美人ですね。)

5人が困惑したり見惚れている中、

「有坂君、羅號の乗組員集めたのね。」

「ちよっと有坂くん、その人誰なの!？」

「おいおい、まさか彼女か!？」

「ああ、紹介するよ。この人はアネットさんだよ。」

次の瞬間、アネットは本来の姿に戻り。

「皆さん初めまして。旧レムリア王国第一王女アネットIIイコンIIエ
ピファネス。以後お見知りおきを。」

アネットが自己紹介すると、

「えっと、レムリア王国・・・?」

「聞いたことない国ですね。」

有坂は話した。

超古代文明レムリアのこと、アネットが昔起きたクーデターで国を
追われたこと、そして『レムリア帝国』に対抗する海底軍艦『羅號』の
ことも・・・

「・・・なるほど、だからみんなを集めたのね。」

「うん、改めて言うよ。みんな、羅號に乗ってくれないか？もちろん強
制はしない。僕達が戦うのは霧よりも遥かに強大な軍事国家だ。
はつきり言っただ命の保証はない。行くかどうかはみんな決めてく
れ。」

しばらく経って、天羽が口を開いた。

「分かったわ。私達も乗せて。」

「えっ、いいの？」

「だって、群像達が奮闘しているのに自分達は何もできないだなんて耐えられないわ。それに私も群像達に会いたいと思っていたから。」

「俺達も風穴を開けたいと思っただころだ。」

「そうですよ！抜け駆けなんてずるいです！」

「わ、私もできる限り頑張ります！」

「私もレムリア文明の技術に興味ありますので。」

「みんな・・・」

「ええ、だから私達を羅號に乗せてくれる？」

「うん、それじゃあみんな力を貸してくれ！」

「「「おう！」」」

それから二週間、メンバーで特訓を行った。

短い期間だったが、学院のチームを組んでの戦術シミュレーションの経験を活かしたおかげか、短時間で物になった。

そして遂に、羅號に乗り込む時がやってきた。

必要な物資はブルーノアに積み込み、レムリア文明の超技術『量子化空間跳躍』クワンタム・ワープによって羅號がいる日本海大和堆にワープすることだ。

「必要な物資はすべて積み込んだわ。」

「それじゃあ、ワープ開始！」

そう言うのとブルーノアの前に緑色のリングが現れた。

ブルーノアがそのリングの中に入ると、緑色のトンネルを通っているような感覚になり、数秒後出ることができた。

「ワープ完了。目標海域に着いたわ。」

「ここが・・・」

「見たところ、羅號らしき軍艦が見当たらないのですが・・・」

「待ってね。今ジャマーを解除するから・・・」

次の瞬間、海を映していたところがぼやけて、巨大な軍艦が姿を現

した。

「これが・・・」

「海底軍艦『羅號』・・・」

そこには大和型の艦橋部に四連装砲、艦首に巨大なドリルを搭載した軍艦がいた。

あまりの巨大さに有坂達は言葉を失う。

その後、羅號と通路をドッキングし物資を搬入して有坂達は羅號に乗り込む。

そして、各々が持ち場に着くと、

「火器管制装置及び各種兵装異常無し！」

「ソナー・センサー類も問題無し！」

「各種操艦システム異常ありません！」

「田ヶ谷さん、準備はいいですか？」

「動力炉の駆動システム異常無し！準備完了、グラビティ・エンジン重力炉点火!!」

そう言うと動力炉が大きな駆動音を立てて動き出した。

「動力炉点火成功！」

「有坂くん、羅號発進準備完了！いつでもいけるよ！」

有坂は頷くと、

「よし！海底軍艦『羅號』発進!!」

その瞬間、羅號は復活した。

今度は戦争に勝つためでは無く、全人類を守る為――

第4話 予兆

ーレムリア帝国 帝都ジオラビランスー

羅號が発進したその頃ー

地下空間に存在するレムリア帝国帝都『ジオラビランス』の大小様々な建築物の中に黒い正方形の建築物があった。

その建物の中に白いマントを羽織った青年がいた。

その少年こそレムリア帝国国家元首『ゼノン』タイタニア』であった。

ゼノンが各方面の状況を把握している頃、通信が入る。

レムリア帝国軍情報局局长『パルサー』オーヴェント』だ。

「閣下、報告がございます。」

「なんだ？」

「先程、日本海大和堆に重力炉のエネルギー反応を確認。『羅號』と確認しました。」

「・・・そうか。」

ゼノンは一旦間を置くと、

「恐らくアネットの差金だ。彼女は王女であると同時にエンジニアである。だから羅號に細工・隠蔽する事ぐらい容易いだろう。」

「では、どのように？」

「ふむ・・・『モンタナ』を向かわせる。『あの男』は羅號との再戦^{リベンジ}を望んでいる。それを叶わせてやろうじゃないか。」

ゼノンは『モンタナ』の艦長に通信を入れる。

ー太平洋の何処かー

「片付いたか。」

男が呟く。

そこには一隻の戦艦がいた。

艦橋の形からアメリカ型戦艦と推測できるが、艦首に2本のドリル

を搭載していることから異形の戦艦だということは確かだ。

そしてその戦艦の周りは軍艦が数隻いた……いや、燃え上がっていた。

そう、霧の軍艦だ。

なんとこのモンタナは霧の艦隊東洋方面第二巡航艦隊を単艦で壊滅させたのだ。

「ふん、霧などこのモンタナの前では鉄屑スクラップも同然。恐るるに足りん。」

男はそう吐き捨てる。

服装からしてアメリカ海軍士官と思われるが、右目部分が機械でできていた。

そして艦橋にはその男だけで無く、白い作業着を着た人が何人もいた。

「艦長、ソナーに感あり。霧の潜水艦と思われます。」

「ほう、ならそいつも沈めるとしよう。潜航始め！」

そう言うと、モンタナは音を立てて潜り始めた。

「なんだあれは……」

霧の潜水艦イ400は絶句した。

事の始まりは数時間前まで遡る。

突如東洋方面第二巡航艦隊より『正体不明の戦艦より攻撃を受けている』との通信を最後に反応が途絶えたのだ。

その為、イ400とイ402は偵察に向かったが、そこで見たのは第二巡航艦隊がたった一隻の戦艦によって蹂躪される様だった。

「旗艦ナガト以下、すべての艦艇の反応消失……」

驚くのも無理はない。

本来世界各国の軍隊を上回る科学力を持ち圧倒してきた霧が、なす術もなく蹂躪されるなど誰が想像出来ようか。

次の瞬間、その戦艦はこちらに気付いたのか潜水し、こちらに接近した。

「くっ、侵食魚雷発射！」

イ400とイ402は侵食魚雷を発射する。

その戦艦は迎撃手段が無かったのか、侵食魚雷は全弾命中した。
だが……

キイイイイン！

甲高い音が鳴り響き、侵食魚雷は緑色の光に包まれて消滅した。

2人は驚愕する。

「馬鹿な、侵食魚雷のタナトニウムを吸収、無力化しただと……」

「我々にそんな能力は無い、あり得ません……」

するとモンタナの艦底部の各所からハッチが開き、

「ロケットランチャー、fire!!」

ズドドドドドドド!

その瞬間、艦底部から無数の噴進弾は放たれた。

「クラインフィールド展開!」

2隻はクラインフィールドを展開したが、

「……えっ?」

なんとクラインフィールドを展開しているにも関わらず、その噴進弾は船体を貫通し、イ402は爆発した。

「イ402!!」

イ400の叫びも虚しく噴進弾が数発命中し、メンタルモデル諸共爆沈した。

「敵潜、2隻とも撃沈。」

「艦長、司令部より通信が入っています。」

「繋げ。」

国家元首ゼノン⇨タイタニアとの通信が繋がった。

「ロバート艦長。モンタナの様子はどうか?」

「良好だよ。問題は『奴』との戦いだが……」

「その事についてだが、『羅號』の反応が日本海大和堆で確認された。」
するとロバートの表情は一気に変わり、

「……フフフ、フハハハハ!!そうかそうか、やっと奴と戦えるのだな!何年待ったことか……」

「とりあえずモンタナには横須賀に向かってもらう。」

「・・・それはどうしてだ？」

ゼノン は情報局が調べた羅號の乗組員の情報を出す。

無論、有坂と群像の関係も話した。

「・・・というわけで、羅號は蒼き鋼『イ401』と合流する可能性が高い。現在、イ401は横須賀要塞港に停泊している。そこへ行けば、必然的に羅號に会えるだろう。無論、迎撃艦隊を向かわせるが相手はラ級戦艦だ。その程度で沈むのはまず無いだろう。」

「・・・了解した。」

ロバートは通信を切った。

「進路、横須賀要塞港に設定！両舷全速！」

モンタナは横須賀に向かった。

103年ぶりの再戦^{リベンジ}を果たす為に・・・

第5話 遭遇戦

一方、羅號は――

「各種航行システム、今のところ異常はありません。」

「田ヶ矢さん、機関部の様子は？」

「駆動システム及び動力伝達システム異常無し。重力炉も正常です。」

羅號クルーが各種システムを確認している時、

「っ！タナトニウム反応確認！侵食魚雷です！」

「来たか…花島さん、迎撃を！」

「了解！」

そう言うと花島はコンソールを動かして右舷の四連装魚雷発射管が動き、

「2番魚雷発射管、迎撃魚雷撃て！」

その瞬間、4本の魚雷が放たれそのまま12本の侵食魚雷を破壊した。

「侵食魚雷、迎撃成功！」

「響さん、敵艦隊がどんなのかスキヤニングできる？」

「ええ、やってみるわ。」

響真瑠璃は侵食魚雷が向かってきた方向から敵艦隊を割り出す。

「特定できたわ。これは…ナガラ級7、重巡洋艦マヤ、大戦艦コンゴウと確認！」

「おいおい！いきなり大戦艦のお出ましかよ！」

「落ち着いて！月野さん、そのまま浮上して。花島さんは主砲及び副砲の動作チェックを！」

「了解！」

「羅號、浮上始め！」

羅號は大きな音を立てて浮かび上がる。

「浮上してくる…？何を考えている？」

大戦艦コンゴウは未知のエネルギー反応を感知し、重巡マヤと連携して沈めようとするが潜水艦らしき敵艦が浮上した為コンゴウは困惑していた。

そして大きな音を立てて羅號が浮上した。

全長390mの巨体が浮かび上がり、これにはコンゴウやマヤもたじろぐ。

「デカイ…だが！」

コンゴウの主砲が展開し、そこからビームが放たれる。

マヤや他のナガラ級も同様にビームを撃ち、やがて羅號に迫る。

だが、

キイイイイン!!

ビームが当たった瞬間、緑色の光に包まれ消滅した。

「バカな…ビームを吸収、無力化しただと…」

「なにこれ！…こんなのないよ〜！」

次に侵食弾頭を搭載した砲弾と魚雷で攻撃したが、さっきのビーム同様吸収、無力化された。

羅號の圧倒的なスペックにコンゴウはおろか有坂達も驚愕していた。

「なんじやありや…」

「アンチ・エネルギーシステム
『エネルギー吸収機能搭載特殊装甲』アフソープ・アーマー『A A』。通常弾頭や核弾頭はもちろんのこと、侵食弾頭や超重力砲のエネルギーを吸収、無力化する装甲よ。」

「なにそれ、チートじゃん…」

「だけど敵側もA Aを無効化する技術を持っているから無敵とは言えないけど…」

「有坂！主砲の装填終わったぞ！」

有坂は頷くと、

「よし！全主砲、斉射!!」

その瞬間、羅號の主砲が火を噴き、コンゴウ艦隊に向かった。

そしてナガラ級を4隻撃沈した。

「ナガラ級4隻撃沈！コンゴウ、マヤは未だ健在！」

「有坂、主砲の装填及び照準に約1分かかる！」

「分かった。その間は副砲で応戦して！」

主砲が装填している間に副砲で残った敵を攻撃する。

コンゴウも反撃するがビームと侵食魚雷は吸収、無力化され、羅號の副砲は命中したが、クラインフィールドで無力化された。

「くっ、厄介だな。クラインフィールドとかやらは。」

「副砲じゃ決定打にならないわ。主砲の装填が終わらないと…」

「主砲撃てるぞ！」

「分かった！主砲、一斉射！」

主砲が火を噴き、12発の砲弾がコンゴウ達に向かってくる。

「フン、無駄なことを…」

コンゴウは今現在クラインフィールドを張っている為、羅號の主砲も効かないと高を括っていたが、次の瞬間、

ズドン！

なんと貫通してナガラ級は轟沈、マヤは艦尾に直撃し船体が傾いてしまった。

コンゴウも艦首と中央部に直撃し主砲2基が吹き飛び中破した。

「なんだと…なぜクラインフィールドを貫通して…」

その瞬間、コンゴウの重力子機関に誘爆し爆沈した。

マヤも同様に爆沈し、海の底に沈んだ。

「…コンゴウ及びマヤ、轟沈しました。」

「響さん、メンタルモデルの反応はキャッチできる？」

「ちよつと待ってて…見つけたわ！モニターに出すわね。」

そう言うともニターに現在の状況が映る。

コンゴウは誘爆しメンタルモデルが吹っ飛ばされた為、船体から離れた場所があり、マヤは船体の中に反応を探知した。

「しかし、どうやって回収するんだ？」

「うくん…『源兵衛』を使うのはどう？」

「えっ！あれって陸戦用の兵器ですよ！確かに装甲が強靱で耐圧性も優れているとはいえ危険では…」

「だが、これしか方法は無い。天羽さん、僕がいない間艦のことお願

い。」

「分かったわ。…無事に帰ってきてね。」

有坂は頷く。

羅號が潜航し、ある程度の深度に達すると艦底部のハッチが開いた。

そこにはあるマシン：『源兵衛』が投下された。

緑色のボディに背中に搭載された2基のバーニアが特徴的な人型機動兵器だ。

「響さん、メンタルモデルの反応は何処か分かる？」

『反応からして、このまま真っ直ぐ進めば見つかると思うけど…』

「分かった。」

そう言うのとバーニアを起動して進む。

すると所々欠けているコンゴウを発見した。

有坂はコンゴウをやさしく掴むと腹部の格納スペースに入れた。

続いてマヤのメンタルモデルは船体内にあるので、沈んでいるマヤに近づきメンタルモデルを回収するため邪魔な装甲を引っ剥がす。

内部に侵入したが、奇妙な音が鳴り響く。

それでも進むとマヤを見つけたが…

「…何あれ？」

『〃カーニバルだよっ！〃 〃カーニバルだよっ！〃 〃カーニバルだよっ！〃』

『…さあ？』

まるで壊れたラジオのように同じ事を繰り返しているマヤだった。

『…さあ？』

『壊れているんじゃない？』

そう言いながらも回収する。

回収し終えた後、源兵衛は羅號に帰還する。

回収したメンタルモデルはメデイカルルームへと運ばれて修復さ

れることになった。

「アネットさん、二人の様子は？」

「コンゴウの方はこのまま安静にしていれば問題ないわ。問題はマヤの方だけど…」

「修復不可能なのか？」

「いや、マヤの場合メンタルモデルではないの…」

「えっ？どう言うこと？」

「厳密にはメンタルモデルに似せて作られた監視ユニットなの。おそらくコンゴウを監視する為に作られたんだと思う。」

「…つまり、マヤは元々メンタルモデルが存在しないってこと？」

「そういうことになるわ。ちょっと待ってね…」

彼女はコンソールを動かすと、手のひらサイズの球体…ユニオンコアが現れてマヤの体内へと入っていく。

次の瞬間、躯体が光り始めた。

「これでこの子はメンタルモデルを獲得したわ。性格も以前と同じように調整したから、これで問題はない筈だけど…」

「ねえ、さっきの球体は…」

「あれはユニオンコアって言って、霧の機関部的存在で…人間で例えるなら脳と心臓を兼ね備えたものよ。」

そうこう話している内に響から通信が入る。

「有坂！横須賀の様子をハッキングしたけどとんでもないことになっているわ！」

その報告を聞いて有坂は司令室へと入っていく。

「響さん、横須賀港の様子は？」

「モニターに出すわ！」

次の瞬間、モニターに横須賀の様子が映る。

そこには燃え上がっている横須賀要塞港と、何やら2隻の戦艦が合体したような巨艦がいた。

その巨艦を中心に海が割れ、その中に潜水艦がいた。

「霧の大戦艦ハルナ、キリシマです！それにあれは…」

「イ401…群像達か！」

「おいおい、これって超重力砲を撃つつもりじゃ!？」

「しかも、合体しているということはその分超重力砲の威力も桁外れなのでは…」

各クルーが大騒ぎする中、状況を把握した有坂と天羽は冷静だった。

アネットは不思議に思うが、その理由が明らかになる。

超重力砲のチャージが完了しかけた時、異変が起きた。

「えっ？侵食魚雷命中！チャージ中に命中したことにより超重力砲のエネルギーが逆流、暴走している模様！」

「ちよつと待て！侵食魚雷は何処から？」

モニターで確認すると、なんと戦艦三笠に設置した自動発射装置キャニスターから発射されたものだ。

完全にハルナ達は裏をかかれた。

縮退エネルギーを制御出来なくなり、クラインフィールドの展開もままならない状態の中、イ401はありったけのミサイルをハルナ・キリシマに叩きつける。

遂にエネルギーの過負荷に耐えきれなくなった2隻はそのまま大爆発を起こした。

「ハルナ、キリシマ共に反応消失…」

「群像さん達、これを狙ってたの…」

「ううん、多分一か八かの賭けだよ。」

「博打ね…まあ、群像くんらしいけど。」

「それよりどうする？会いに行くか？」

「うん、そうするよ。アネットさん、ワープ装置の状態は？」

「ええ、良好よ。いつでもいけるわ。」

「よし、量子化空間跳躍始め！」

そう言うのと羅號の前方に緑色のリングが現れ、羅號が入っていくとリングはそのまま小さくなりやがて消えた。

第6話 再会

―横須賀沖―

(私は…私はまだ、死にたくない…！)

(そうか…これが、後悔…)

ハルナ、キリシマはイ401との戦いに敗れて、そのまま爆発した。しばらく経ったのち、静かになった。

「ハルナ、キリシマ爆沈。反応、確認出来ず。」

「敵大戦艦撃沈、作戦成功です。」

「おいおい群像くこういう博打打つの大概にしろよ〜」

杏平が愚痴をこぼす中、群像はイ401のメンタルモデル、イオナに声をかける。

「イオナ…その、大丈夫か？」

「ううん、私たちは兵器。命令に従うのは当然のこと。」

「そうか…」

その時だった。

突然イオナが驚いた反応をした。

「イオナ、どうしたんだ？」

イオナは外の映像を群像達に見せる。

その映像に群像達は驚愕する。

何故なら、かなり大きい緑色のリングが展開されていたからだ。

「なんだ、あのリングは…!?!」

「分からない…膨大なエネルギー反応を検知。何か来る…」

次の瞬間、緑色のリングの中から大きな音を立てて巨大戦艦が出てきた。

その巨大さに群像達はまた驚愕した。

大和型の艦橋に酷似した構造から日本の戦艦だが、艦首の背びれのような構造物と巨大なドリルを搭載している異形の戦艦だ。

全長からして400mくらいあった。

「なんだあれは…!」

「おそらく霧の艦ではない。その証拠に重力子機関とは異なるエネルギー

ギー反応をしている…」

イ401クルーに動揺が走る中、静が羅號の通信をキャッチした。
「艦長、あの戦艦から電文です！『貴艦の艦長に話がある。浮上せよ』
との事です！」

「ちよつとそれ、間違いなく危ないんじゃない？」

「いおりが文句を言う中、群像は思案する。」

（相手が何を企んでいるかは分からないが、対話を望んでいるなら好都合だ。戦つても現段階で勝てる可能性は低い…）

「お前ら落ち着け。イオナ、浮上させるんだ。」

「分かった。」

「お、おい、群像!？」

「弾薬を撃ち尽くした今、勝てる可能性は低い。むしろ対話を望んでいるのなら好都合だ。お前達はいざと言う時に備えてくれ。」

「了解!」

浮上したイ401に羅號をつける。

「アネットさん、ついてきてくれ。他の者は待機だ。」

そう言うと、有坂とアネットは左舷へと移動する。

そこには驚愕の表情をしたまま凍りついた群像と無表情なメンタルモデル、イオナがいた。

もちろん、静以外のクルーも有坂を見て凍りつく。

「ま、マジで…!？」

「えつと、皆さん、ご存じなんですか？」

「有坂鋼。学院時代の我々の友人です。艦長にとっては親友にあたり
ます。」

「久しぶりだな、群像。」

「ご、鋼なのか…?」

「ああ、あの時の約束を果たす為に来た…と言っても話したいことがある。」

群像は気まずい顔をしているが、

「なんで置いて行つた？僕の父さんが霧との戦いで殺されたからか？」

「…君の父親が霧との戦いで戦死して、霧に対していい感情を抱いてないと思つたから…」

そう言うのと群像は目を背ける。

「…確かに霧に対していい感情を抱いてないと言えばそうだが、かと言つて激しい憎悪は抱いてない。霧が人類を滅ぼす存在かどうかわからないが…このまま何もできないのはとても辛い。だから、一緒に風穴を開ける手伝いをしたいんだ！」

有坂は決意を表す。

群像も彼の決意を聞いて頷いた。

「…分かつた。そこまで言うなら君の意志を尊重する。喜んで迎え入れよう。それとさつきから気になつたのだが、隣にいる人は？」

「ああ、紹介しよう。アネットさんだよ。僕達に海底軍艦『羅號』のことを教えてくれたんだ。」

「ん？僕達だと…？」

「アネットさん、司令室を映してくれ。」

そう言うのと、アネットはコンソールを動かして群像に映像を見せた。

『やつほく久しぶり、群像君♪』

「なっ！天羽琴乃!!」

『オレ達もいるぞ!』

『ええ、久しぶりね!』

「大介、それに真瑠璃まで…」

『ご無沙汰してます。』

『あつ、僕もいますよ。』

「凜に昴まで…」

「もちろん、みんな望んでこの羅號に搭乗したんだ。こうして再会して共に戦えるのだから。」

今度はイオナが質問してきた。

「ねえ、この戦艦内にメンタルモデルの反応があるのは何故？」

「あく、なんとというか…羅號を動かした際にコンゴウの艦隊と遭遇してしまつて、兵装の試運転がてら沈めちゃつたんだ。もちろん、コンゴウとマヤのメンタルモデルを回収して今は安静にしているよ。」
その言葉に群像とイオナは驚いた。

「驚くのも無理は無いわ。羅號含め万能戦艦ラ級は単艦で霧の方面艦隊を圧倒する戦闘力を秘めているの。」

アネットがそう説明する。

「なっ!?そんなに強いのか!?!」

「ああ、信じられないかも知れないが、事実だ。」

そう言つた次の瞬間、

ズドオオオン!

大きな音が鳴り響いた。

「何事だ!!」

『防護壁が砲撃を受けました!通信によると正体不明の巨大戦艦が襲撃してきた模様です!』

「群像、あれ…」

イオナが指差したところを見ると、そこには一隻の戦艦がいた。

その戦艦は壁を破壊した後、こちらに接近してきた。

その為、有坂や群像達は艦内に戻る。

艦内の司令室に入ると、状況を確認した。

「響さん、敵艦の映像出せる?」

「今出すわ!」

モニターに敵艦が映し出される。

敵艦の映像を見て有坂とアネットは驚愕する。

その戦艦は三連装砲三基に二本のドリル、煙突部に八本のパイプを接続し、艦橋の構造もアメリカ型な戦艦だった。

この戦艦の名を有坂とアネットは知っている。

「万能戦艦…モンタナ…!」

一方、群像達もその戦艦を映像で見た。

「おいおい、なんだよありや…」

「艦橋や主砲の形状から大戦時の米戦艦に酷似していますが…」

イ401副長織部僧が冷静に思考している中、
「っ！艦長、あの戦艦から通信が入ってきます！」

その瞬間、双方のモニターに一人の男が映った。

男は中年でアメリカ海軍士官服を着ているが、特徴的なのは右眼辺りが機械化されていたことだ。

『フン、顔を合わせるのは初めてだな、イ401と羅號のクルー諸君。』
男がそう話す。

「もしかしくなくても…モンタナの艦長ですか？」

『いかにも、モンタナ艦長ロバート・マッケンゼン大佐だ。103年ぶりに羅號と戦えるとは、俺も中々ついているな。』

「っ！まさか…大戦時の軍人!？」

『そうだ！あの時…羅號と相打ちとなってモンタナが沈む中私は冷凍睡眠カプセルの中に入りなんとか助かった！だが、冷凍保存される中で傷口が腐り始めて、結果このような姿になったのだ!!』

男はこれでもかと激怒しながら語る。

『この痛み、決して忘れん!!必ず羅號に復讐してやる…その為にこの私とモンタナは海の底から蘇ったのだからな!!』

男はそう言い放つ。

これには群像達も怯むが…

「…そうか。なら、生きているだけ幸運だな。」

『何…?』

「羅號の生命維持装置はアネットのみしか動かなかった。当時の艦長は艦と運命を共にし、脱出させた乗組員は帝国軍の潜水艦によって内火艇諸共海へ消えた。」

『なんだと…!?!』

「だから、当時のことを僕達に教えてくれたのはアネットさんしかいなかった…」

『フン…では、貴様は?』

「僕は二代目…二代羅號艦長有坂鋼!!先代の…おじいちゃんたちの犠牲は無駄にしない!!」

有坂はそう言い返す。

しばらくの沈黙があつたのち、

『フン、ほぎけ！なら、ここ横須賀を貴様らの墓標としてくれるわ!!』
そう言い放つと、通信が切れ、モンタナは動き出す。

「敵艦、動き始めました…っ！敵艦の重力炉、出力臨界点を突破！」

「…来るか！」

群像達も慌ただしかった。

「艦長！モンタナから膨大なエネルギー反応が！」

「…何が起きている!?!」

モンタナの周りに水飛沫が立ち始め、機械音が鳴り響く。

『今度はあの時のようにはいかんぞ！全力で貴様らを打ち砕く!』

次の瞬間、群像達は驚愕することになる。

何故なら――

バシユウウウウウ!!

大きな音を立てながら、モンタナは宙に浮かび上がったからだ。

そう、飛んだのだ。

「と、飛んだああああ!?!」

「おいおい、こんなのありか!?!」

「一体どういう原理で浮かんでいるのかが分かりませんね。」

「群像、あの戦艦おそらく重力そのものを制御して浮かんでいると思
う…。」

「何だと!」

驚く群像達をよそに、ロバートは豪語する。

『見たか！モンタナはあらゆる機能を発揮出来るぞ!』

だが、有坂達は臆することなく、

「それがどうした！モンタナに出来て羅號に出来ないことは無い!!」

そう言い返す。

「田ヶ谷さん！重力炉の状態は!?!」

「安心して、重力炉は正常。問題なく重力制御飛行が出来るよ!」

有坂は頷く。

「よし！重力制御開始!」

その瞬間、羅號にも機械音が鳴り響く。

「…準備完了！離水始め！」

有坂の合図で羅號も大きな音を立てて、そのまま宙に浮かび上がった。

羅號もまた飛んだのだ。

「離水完了！花島さん！」

「安心しろ！主砲及び副砲の各種システムに異常は無い！いけるぞ！」

「目標、敵艦『モンタナ』！砲撃戦用意！」

羅號の第一、第二主砲がモンタナに向けられる。

一方、モンタナも羅號に照準を合わせていた。

『羅號も飛んだか…なら、叩き落とすまでよ！砲撃戦用意！』

その瞬間、モンタナの全砲門が羅號に向けられた。

『さあ、103年前の続きを始めようぜ!!』

「ここは日本だ…亡霊が偉そうに居座るな!!」

ここ横須賀で103年ぶりの再戦リベンジの火蓋が切って落とされた――

第7話 再戦

「主砲全門一斉射！撃て！」

ドオオオオオン！！

先手を打ったのはモンタナだった。

モンタナの40cm砲9門が一斉に火を噴いた。

放たれた砲弾は羅號に向かつて飛んできて、6発命中した。

羅號とモンタナにはA^{アップローンアーマー}Aがあり、核兵器はおろか霧の超重力砲をも吸収・無力化する代物だが、羅號もモンタナもそれを無効化する『中和装置』付きの砲弾を持っていた。

その為、モンタナの砲弾は羅號にダメージを与えていた。

「右舷中央部に被弾！ですが第一装甲板で食い止めました！」

「艦長、照準完了！撃てるぞ！」

「よし、第一第二砲塔全門斉射！」

「了解！」

羅號も第一第二主砲を撃った。

モンタナに3発命中し、モンタナは大きく揺れた。

モンタナの艦内に悲鳴が上がる。

「くっ、なんて威力だ…流石20インチ（≒51cm）砲を積んだだけのことはある…」

現段階では羅號が有利だ。

羅號は45口径51cm砲に対51cm砲防御装甲を持っていたのに対してモンタナは50口径40cm砲と装甲も対40cm砲防御だった。

羅號はモンタナの砲弾が6発命中したが、対51cm砲防御装甲で食い止めた。

逆にモンタナは羅號の砲弾が3発しか命中しなかったが、対40cm砲防御装甲では51cm砲弾を防ぎ切ることが出来ず、モンタナの装甲に穴が空いた。

「第一装甲板貫通！第二装甲板で食い止めましたが、小破した模様！」
「第四、第六区画で火災発生！さらに衝撃で各所に被害が出ています

！」

乗組員から被害の報告が次々と上がる。

だが、モンタナには隠し玉があった。

「フン、狼狽えるな！ロケットアンカー用意！」

すると斜め上を向いていたモンタナの艦首突起物が真正面を向き、モンタナが羅號に近づいて来た。

すると——

「ロケットアンカー射出!!」

すると、パシユン!!と音と共にワイヤー付きロケットアンカーが放たれ、そのまま羅號の艦首構造物に巻き付いた。

「ロケットアンカーだと!？」

「何をする気だ?」

有坂達は疑問に思うが次の瞬間、

「っ！艦長、モンタナが急速接近してきます!!」

「何っ!？」

有坂達は驚愕した。

モンタナがワイヤーに引き寄せられる形で羅號に急接近してきたのだ。

しかも、モンタナの艦首ドリルを回転させながら物凄い速度で羅號に迫ったのだ。

「ハハハハ!!くたばれ羅號!!」

モンタナが迫る中、

「まずい、艦首ドリル高速回転!!」

羅號も負けじと艦首ドリルを回転させ、遂に——
ズガガガガガガガ!!

両艦のドリルが火花を散らしてぶつかり合った。

両艦内に衝撃が響く。

「くっ、なんて衝撃だ……」

一進一退の攻防をしている中、

「まずい、ドリルの摩耗率が上昇!このままじゃドリルの駆動回路が焼き切れてしまう!」

羅號が押されていた。

羅號のドリルは一本なのに対しモンタナのドリルは二本と数においてモンタナの方が優っていた。

その為、ドリルの負荷は羅號の方が大きい。

このままだと羅號のドリルが摩耗熱で回路が焼き切れ、機能不全に陥ってしまう。

そんな中、有坂は指示を飛ばす。

「田ヶ谷さん、重力制御を20秒切って！その間主砲全砲門の照準をモンタナに固定して！」

「分かりました…では！」

田ヶ谷はレバーを勢いよく下すと、羅號は急降下した。

すると、モンタナも急降下した為慌ててスラストを噴かせて踏み留まったが、羅號の重量に耐えきれずワイヤーが限界まで伸ばされた。

「くっ、やむ終えん。ワイヤーを切り離せ！」

これ以上落下するのを防ぐ為、ワイヤーを切り離す。

この時、ちょうど20秒経った。

重力制御をONにして姿勢を制御すると、

「…今だ、全門斉射!!」

12門の主砲が一斉に火を噴いた。

「いかん、急速回避！」

モンタナは急いで回避しようとするが、間に合わずに艦首に命中した。

艦首のドリルは右側が破壊され、左側はドリルの回転が止まった。

「艦首に被弾！右舷ドリル大破、左舷ドリルは機能停止…」

「クソッ、ぬかったか…」

ロバートは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

さらにさっきの砲撃でモンタナは深刻な損害を被った。

「先程の被弾で艦底部に亀裂が発生！さらに船体各所にヒビが…」

そう、実はモンタナはラ級艦の中で装甲が脆弱であり、その理由として構造上の欠陥にある。

それは『何処か一箇所ダメージが入ると船体全体にダメージが伝わる』というものだった。

その為、モンタナは羅號の主砲があと2、3発当たったら爆散する危険性があった。

「敵艦の主砲があと2、3発当たったら、こちらの装甲が持ちません！」

「分かっている！ならばヤツの主砲を封じれば済むことだ。進路を北西に取れッ、両舷全速！」

するとモンタナは羅號から距離を取り、そのまま離れていった。

「見ろよ艦長！奴さん尻尾巻いて逃げてくぞー！」

（ん？妙だな…なんで距離を取って…）

有坂は疑問に思ったが、天羽が真意に気づく。

「…違う。こちらの主砲を封じるつもりよ。」

花島達は一瞬疑問に思ったが、有坂も真意に気づいた。

「まずい、今すぐ追うぞー！両舷全速！」

「えっ、り、了解！」

羅號も慌ててモンタナを追う。

モンタナと羅號は横須賀上空へと戦場を移した。

もちろん、横須賀の住民は先程の霧の襲撃に空飛ぶ戦艦同士の戦闘と経験したことのない光景に皆驚愕していた。

「フッ、これでこっちは撃ち放題だ、撃てー！」

モンタナはここぞとばかりに主砲を撃ちまくる。

放たれた砲弾は羅號に次々命中する。

「ええい、応戦するぞー！」

応戦しようとするが、有坂が何かに気づく。

「っ！待て、射線をよく見ろ！」

花島は一瞬疑問に思ったが、有坂の言っている意味が分かった。

そう、モンタナの周りには居住区があり、もし外したらそこにいる民間人が巻き添えになる事を意味していた。

羅號の主砲を撃たせない為に横須賀上空に陣取り、羅號を誘き寄せたのだ。

「撃つ時は海側に向けて撃つ。山の手側に回り込め！」

羅號も有利な位置取りで応戦しようとしたが、モンタナも甘くはない。

モンタナも住民が群がる場所に移動して羅號の主砲を封じた。

そうこうしている間にもモンタナの砲弾が命中し続け、羅號の装甲板も歪み始めた。

「くそッ、好き放題撃ちやがって!!」

「いくら羅號の装甲が強靱でも持たないわよ！」

クルーから焦りが出てくる中、有坂は思案した。

(…そういうえば、モンタナはこちらより低く飛んでいるが、まさか…) 「響さん。モンタナの船体をスキヤニングできる？」

「えっ、ええ、やってみるわ。」

真瑠璃はコンソールを操作し、モンタナの船体をスキヤニングする。

そしてその結果を有坂に見せる。

(やっぱり、さっきの砲撃で艦底部に亀裂が発生している。ようし、これなら…) 「花島さん、ちょっといい？」

「えっ?」

有坂は花島にあることを耳元で伝える。

「…なるほど、そいつはいけそうですね。」

「できるか?」

「ええ、なんとか!」

有坂は頷く。

「よし、本艦はこれよりわざと隙を作ってモンタナに撃たせる!」

有坂の作戦にクルーは驚愕する。

「そ、そんな、危険過ぎます!もし装甲が破られたら…」

クルーの心配をよそに、有坂は述べた。

「その時はその時さ。羅號の装甲は僕達を守ってくれると信じよう。」

「…なるほど、賭けね。」

「…このままじゃ罅が開かないから仕掛けるって寸法か。いいぜ、一

発仕掛けてやりましょう!!」

「この次モンタナが海を背にした時砲撃する。チャンスは一度きりだ、しくじるなよ!」

そう言うのと羅號は動き出す。

「どうした、ぐるぐるまわっているだけではつまらんぞー!」

ロバートは羅號が手を出せないのを知ってて挑発していた。

「まだだ、あと少し…!」

羅號はタイミングを見計らって、遂に――

「今だ!!」

羅號の12門の砲が火を噴いた。

やがてモンタナに命中し、艦内が大きく揺れた。

「三番砲塔大破!」

「くっ、主砲が一基潰れたか…だが!」

次の瞬間、モンタナの二基の主砲が火を噴き、命中した瞬間羅號に大きな音が鳴った。

この時ロバートは勝利を確信した。

羅號の場合、次弾を撃つのに60秒のインターバルがあるが、モンタナの場合は20秒なのだ。

つまり、一分間に羅號は一発しか撃てないのに対してモンタナは三発撃てるのだ。

さらにモンタナは今まで羅號の右舷中央部を集中的に当て続けていた。

いくら羅號の装甲が強靱でも同じ箇所を撃たれ続けたら装甲が破壊されるのは目に見えていた。

そして先程の音は羅號の装甲板が破壊された音だ。

羅號の砲撃が当たった時は流石に冷や冷やしたが、モンタナはなんとか耐えていた。

その為、このまま畳み込めばいずれ羅號の心臓部『零式重力炉』に命中する…そう確信していた。

そう、その時だった――

「……………えっ?」

ロバートは呆気に取られた。

何故なら、本来一斉射で上を向いている筈の砲が一門だけこちらを向いていたのだ。

それが何を意味するのか…ロバートは悟った。

(ま、まさか…斉射に見せかけて、一発だけ残しておいたのか…)

さつき有坂が花島に伝えていたのは「斉射に見せかけて一発だけ残して発砲する」というものだった。

そして狙うは亀裂が発生しているモンタナの艦底部だ。

「…もう終わりにしよう。撃て！」

その瞬間、羅號から一発放たれた。

そのまま艦底部に命中し、モンタナ全体に亀裂が伝わる。

所々誘爆し艦内に悲鳴が上がる中、ロバートは一言…

「…見事だ。」

ドグアアアア!!

モンタナは爆散した。

そのまま浮力を失い墜落しそうになるが、

「月野さん、全速前進!!モンタナの残骸を海に押し上げて！」

「よ、ヨーソロー!!」

モンタナの残骸を居住区に落ちないように残骸を押し上げて、そのまま海に投棄した。

モンタナは海に沈んでいく。

そしてー

ドガアアアア!!

爆発した。

しばらくの静寂の後、

「モンタナ、撃沈…」

その瞬間、羅號艦内から喝采が上がった。

「しかし、ギリギリだったよ。何せさっきの砲撃で第一装甲板が貫通しているから…」

「…危なかったわね。」

「それでどうします?」

「…ちよつと群像に通信入れて。」

一方、群像達は――

「おいおい、こんなのありか…」

「凄まじい戦いでしたね…」

「……………」

群像達も驚いていた。

無理もない。

自分達も霧との戦いを経験しているが、それが霞んで見える程羅號とモンタナの戦いは色んな意味で規格外だった。

「あつ、艦長。羅號から通信が…」

羅號から通信が入る。

『群像、モンタナとの戦いでこの艦も損傷してしまつて…修理出来るドックつてある?』

「あつ、ああ、一応大型艦船を收容する特別大型ドックがある。そこから修理が可能だ。」

『ありがとう。でも、いきなり入港して現場混乱しないかな…』

「ああ、それなら俺が取りなしておく。」

『助かるよ。』

しばらくして入港許可が降りたので羅號は特別大型ドックに入つていった。

ーレムリア帝国 帝都ジオラビランスー

「…ロバートはしくじったようだな。」

国家元首ゼノンは羅號とモンタナとの戦いをリアルタイムで観ていた。

無論、羅號を倒すことは出来なかったが羅號の戦闘データが取れたのでさほど問題は無かった。

「まあいい、陽動としての役目は達成されたし、良しとするか…」

そう、本命は羅號にあらず別にあり……………

第8話 休息

―太平洋上のとある島沖―

そこには赤い船体の巡洋艦『タカオ』が島に向けて航行していた。「見えてきたわね。あれが艦長の本拠地、どう驚かそうかしら…ウフフフフ…♡」

その時だった。

チカツ……………バチイ!!

「キヤツ!!」

なんと島の方から大量のミサイルやビーム砲が飛んでくる。

「この攻撃パターン…まさか…!」

その直後、タカオは意識を失った。

―横須賀要塞港地下ドック―

そこにはイ401と羅號が収容されていた。

イ401は装備の40%を喪失、ナノマテリアル不足により応急処置が精一杯と厳しい状態だった。

今現在、新兵器『振動弾頭』の積み込み作業が行われていた。

一方、羅號の艦内では……………

「……………暇だ〜」

花島がそう愚痴をこぼす。

「仕方ないでしょ。艦内に留まる事を条件にドック入りを許可されているから…」

「まあ、そんな悪い事だけではないけどね。」

有坂はコンソールを動かし、『あるもの』をモニターに写した。

「モンタナの残骸から他のラ級戦艦のデータが手に入ったし…」

「これは大きいですね。」

そう、有坂達はドック入りを許可されるまでの間モンタナの残骸を調べ、諸元データを手に入れる事ができた。

そこで今後の対策がてらそのデータを見ることにした。

イタリア海軍ラ級戦艦 インペロ

ヴェットリオ・ヴェネト級三番艦として建造

全長：380 m

全幅：93 m

基準排水量：19万2千t

主砲：50口径38cm砲（三連装） 4基 12門

装甲：対38cm砲防御装甲

特性：電磁・水流複合推進器

「インペロ…表向きでは未完成に終わった戦艦だが、秘密裏にラ級戦艦として改造したな…」

「主砲は従来のヴェットリオ・ヴェネト級と変わらないが砲門数は多いな。」

「電磁・水流複合推進器…おそらく水上・水中速力が尋常じゃないくらい速いんですね。」

イギリス海軍ラ級戦艦 インヴィンシブル

G3級巡洋戦艦一番艦として建造

全長：320 m

全幅：45 m

基準排水量：13万5千t

主砲：55口径36cm砲（四連装） 3基 12門

装甲：対36cm砲防御装甲

特性：シールドドリル

「主砲は36cm砲か…羅號と同じ四連装砲だが小口径砲だな…」

「シールドドリル…？シールドマシンの事か？」

「おそらくそうだろう。正面装甲はかなり堅牢だ。」

フランス海軍ラ級戦艦 ガスコーニュ

リシユリユ一級戦艦四番艦として建造

全長：340 m

全幅：52 m

基準排水量：17万7千t

主砲：50口径40cm砲（五連装）2基 10門

装甲：対40cm砲防御装甲

特性：新型照準器、艦尾ドリル

「五連装砲に艦尾ドリル：！随分とユニークな戦艦だな。」

「五連装砲：相当な重量になるからバランスを取る為に艦尾にドリルを付けたのね。」

「なるほど、なら他のラ級戦艦と比べて格闘戦能力は低いな。」

ソビエト海軍ラ級戦艦 ソビエツキー・ソユーズ

ソビエツキー・ソユーズ級戦艦一番艦として建造

全長：360 m

全幅：62 m

基準排水量：20万7千t

主砲：50口径40cm砲（連装・三連装）4基 10門

装甲：対46cm砲防御装甲

特性：艦尾ロケットブースター

艦首ジェットスラスタ

「46cm砲防御か：大和並みだな。」

「艦尾にロケットブースター：か。」

「おそらくナチス・ドイツから持ち帰ったV号ロケットの技術をそのまま転用している。」

ドイツ海軍ラ級戦艦フリードリヒ・デア・グロッツェ

H級戦艦一番艦として建造

全長：370 m

全幅：62 m

基準排水量：22万6千 t

主砲：47口径40cm砲（連装）4基 8門

装甲：対51cm砲防御装甲

特性：V1改、V2改発射機

「厚い装甲に小さめの主砲：ドイツ艦らしいセオリーね。」

「さらにV号ロケットを搭載しているから攻撃力は高いな。」

有坂達が議論していると、アネットから通信が入る。

「有坂君、コンゴウとマヤが目覚めたわ。」

「分かった、すぐ行く。」

そう言うのと有坂はアネットのいるメデイカルルームへ向かった。

有坂が入るとそこにはアネットとコンゴウとマヤがいた。

「えっと…気分はどう？」

「……最悪だ。」

コンゴウは不満そうに答える。

「それより何故助けた？」

「何故って…溺れている人を助けるのに理由なんている？」

「……そうか。」

コンゴウは諦めた様子だった。

「少しくらい抵抗すると思ったんだが…」

「この女から聞かされたが、こんだけ性能差が開きすぎていると抵抗する気すら起きん。めんどくさい……」

コンゴウはアネットから羅號の性能を聞かされ、彼女は抵抗を諦めていた。

その時、コンゴウとマヤが何かを感じ取った。

「どうした？」

「横須賀周辺をスキャンしたら、ハルナとキラシマを発見した。ハルナはメンタルモデルだけ、キラシマに至ってはコアのみだ。」

「…ちなみに様子を見る事はできるっ？」

「できるが…何故？」

「いや、ただ単に気になるから。」

コンゴウがハルナ達がいる屋敷のカメラ等をハッキングして映像を見せる。

そこにはハルナと少女がいた。

その少女はハルナに色々な服を着せていた。

『うくん…これかなあ？それともこっちなあ？いや、こっちも捨てがたい…』

『もう、堪忍してつかあさい……』

ハルナはでかいコートを取ろうとするも、少女に足を取られる。

『まくだ！これからが本番なんだからね！』

「…えっと、これがハルナなのか…？」

「…そうなるな。」

「完全にオモチャにされているわね…」

しばらくすると部屋の扉からメイドが現れる。

『蒔絵お嬢様、検査のお時間です。』

『はい。ハルハル、好きなだけ服選んでいいからね！』

そう言つて少女は部屋を後にした。

蒔絵が部屋を出た後、ハルナはすぐにコートを着る。

『シャキーン！』

『プークスクス…ハルハル、気に入られたなハルハル、フフフフ…そんなことよりもハルナ、私にナノマテリアルを少し分けてくれ。流石に身動きが取れないのはな…』

『承知した。』

「ハルナはあのコートがないと萎えた植物みたいにヘナヘナになるみたいだね♪」

「萎えた植物って…」

再び画面に目をやると、熊のぬいぐるみが動き出した。

「…あれ、なんでぬいぐるみが動いて…？」

「反応から見るにキリシマだ。中にコアを入れてメンタルモデル代わりにしているな。」

「ていうか、あれじゃあキリシマじゃなくて“キリクマ”だね♪」

「プツ…キリクマって、ちよつと笑えるな。」

そんなことしていると、イ401から通信が入る。

「群像、これからどうする？イ401の損害から見てこのままアメリカに向かうのは無謀だ。」

「分かっている。まず向かうのはアメリカじゃない。俺達の拠点『硫黄島』だ。」

アメリカに振動弾頭を届ける群像達は、まずイ401を修理する為硫黄島に向かうことを決め、出航準備を進めた。

―刑部邸周辺―

数時間後日本陸軍の部隊が刑部邸に突入した時、そこには一台の六輪装甲車がいた。

日本軍の装甲車……では無かった。

車内には白い作業着を着た兵士7人と赤色のベレー帽に黒色のコートを着た指揮官が搭乗していた。

この装甲車はレムリア帝国陸軍前線指揮車『FCB―43 ドグマ』だ。

レムリア帝国陸軍はある任務を受けてこの地に派遣された。

この部隊を敵の目から背ける為モンタナに横須賀を襲わせ、そのゴタゴタに乗じて横須賀から離れたところから上陸し、そして刑部邸周辺に上陸部隊を配置した。

「バリアント3台、ホバーバイクに搭乗したPG兵30名それぞれ配置に着きました。」

「日本陸軍の様子は？」

「歩兵部隊は刑部邸に突入、メンタルモデルと交戦を開始。さらに無人兵器『岩蟹』も投入する模様。」

「ターゲットを殺すのに岩蟹まで投入するか。まあ、メンタルモデル諸共始末するから当然か…」

「各部隊準備良し。いつでも強襲出来ます。」

「よし、作戦開始。刑部蒔絵を確保しろ！」

その瞬間、部隊が動き出す。

「フン、まあいい。地上人共がドブに捨てるとう言うのなら、我々が貰うぞ。」

第9話 新たなる航路（たびじ）

ー日本陸軍前線指揮所ー

今現在、日本陸軍の特殊部隊は刑部邸を襲撃しメンタルモデル諸共刑部蒔絵を始末しようとしていた。

何故振動弾頭の開発者である蒔絵を始末しようとしているかという、霧のメンタルモデルと接触していたからだ。

振動弾頭の開発者である刑部蒔絵を霧に奪われるならメンタルモデル諸共始末しようという魂胆だった。

「状況はどうだ？」

「岩蟹部隊は現在メンタルモデルと交戦中。順調に追い詰めていきます。」

ハルナを無人兵器『岩蟹』で追い詰め、作戦は順調かと思われた……
「よしーそのまま奴を追い詰めて……」 ギュオン!!

その時だった。

指揮官と思わしき人物が喋っている途中、甲高い音が鳴った。

オペレーター達が何事かと振り返ると、指揮官の眉間に焦げ目がついていた。

そして指揮官が力無く倒れると、オペレーター達は後ろの存在に驚いた。

その兵は全身黒の装甲服に身を包み、シユータルヘルムを被り赤いメガネのようなガスマスクをつけた兵だ。

数秒の沈黙があつた中、その兵が右手に持っていた変わった形のピストルを今度はオペレーター達に向けた。

次の瞬間、先程の甲高い音が複数鳴り響き前線指揮所は沈黙した。

指揮所を制圧し黒い箱を仕掛けた後、その男は通信を入れた。

「たつた今敵の前線指揮所を制圧しました。」

『よくやった。これで敵軍は混乱するな。』

報告を終えるとその兵はホバーバイクに乗り、その場を離れた後前線指揮所は跡形もなく吹き飛んだ。

そして前線で戦っている兵士達も異変に気づいた。

「隊長！指揮所からの通信が途絶えました！」

「なんだと!？」

その時、何か音が聞こえた。

兵士達が振り返ると、一台の車両が向かってきた。

その車両は六輪の幅が広いバギー車で前面にシャークマウスのペイントと上部には変わった形の連装砲を装備し、物凄い速度で走破していた。

「なんだあれは!？」

周りの兵士が驚愕する中、何かの気配に気づいた。

そこには黒い装甲服を着た兵士がタイヤの無いバイクに乗り、勢いよく飛び降りた。

バイクは自動的に止まり、兵士は着地してブラスターライフルを構える。

驚いた日本軍兵士は銃を撃ちまくるが装甲服によって無効化された。

そしてその兵士が狙いをすませると、

ギュオン!! ギュオン!! ギュオン!!

銃口から赤い光弾が発射され、兵士達の体を貫通した。

難なく敵を倒すレムリア帝国陸軍兵士だが、そこに岩蟹が現れる。

岩蟹のガトリング砲やロケットランチャーで苦戦する中、1人の兵士が背中に担いであったバズーカを取り出し岩蟹に狙いを定める。

次の瞬間、キュイン!!と鳴り響き1秒後岩蟹に大きな穴が開き爆発した。

このような感じでレムリア軍兵士は次々と日本陸軍特殊部隊を殲滅していく……………

一方、ハルナは蒔絵の始末の為に襲撃してきた陸軍特殊部隊と交戦していた。

新兵器『岩蟹』によって苦戦を強いられる中、ハルナも異変に気づいた。

(新たな反応…陸軍ではない?)

ハルナは襲撃してきた日本陸軍の兵士とは異なる反応を検知し、その反応の正体が何か分かると驚愕した。

(馬鹿な…核融合反応だと…！しかもかなり小型の核融合炉…なのかな？)

驚くのも無理はない。

レムリア軍兵士の装甲服『プロテクトギア』と先程のバギー型の装甲車『CB-39 バリアント』の動力源は常温核融合反応電池だ。

パラジウムを用いて核融合反応を起こす電池であり、かなりの大出力を持つ代物で蓄電池故何度でも使えるのが利点だ。

その間に日本陸軍特殊部隊が襲い掛かってくる中、何やら音が聞こえた。

日本陸軍の兵士も音に気付き周囲を見渡したがその瞬間、何か大きな物体が現れその兵士達をそのまま引いた。

先程のバギー型装甲車バリアントが現れ、上部の連装砲をハルナに向けてと甲高い音と共に緑色の光弾が放たれた。

ハルナはすかさずクラインフィールドで塞いだが、バリアントの連装式ブラスタージャノンはクラインフィールドに多大な負荷を与えた。

ハルナは今メンタルモデルのみとなっているのでクラインフィールドの強度は戦艦の時と比べて弱くなっているのだ。

さらにレムリア軍兵士達もハルナの周りに集まり始め、ブラスタージャイフルやバズーカを放ちハルナを着実に追い詰めた。

そしてハルナにとって起こってほしくないことが起きた。

「ハルハル！」

「なっ…！ 蒔絵！」

なんと戦闘中のハルナの所に蒔絵が来てしまったのだ。

これにはハルナはともかくレムリア軍兵士達も驚いていた。

ハルナはすかさず蒔絵の周囲にクラインフィールドを張り防衛の姿勢を取った。

「蒔絵、逃げろと言ったじゃないか。」

「イヤだ!!ハルハルは友達だから…ハルハルはアレを作ったことを許

してくれなくても…それでも友達！友達を見捨てるなんて、そんなの
できない!!」

「蒔絵…」

ハルナと蒔絵が話している中、レムリア軍兵士は銃を構えていた。
彼らは刑部蒔絵の確保を目的としている為、迂闊に撃てないのだ。
膠着状態が続いている中、レムリア軍に動きがあった。

『フン、まさかターゲットがやって来るとは…運がいいな、我々は。』
前線指揮車内にいた指揮官がそう呟く。

彼らは『切り札』を持つている為、余裕であった。

周りにいた兵士がコンソールを動かし準備を整えると、

『中尉殿、準備が整いました。』

『よし！電子戦兵器『ヤシオリ』起動。目標『ハルナ』『キリシマ』照
射始め！』

指揮官の合図で兵士がエンターキーを押すと不気味な機械音が鳴
り響く。

『極上の酒だ。酔い潰れるがいい。』

指揮官が不敵な笑みを浮かべる。

その数秒後、ハルナとキリシマに異変が起こる。

「な…何だ…?!？」

「か…体が…?!？」

ハルナとキリシマは痺れた感覚に陥り、膝について動けなくなっ
た。

さらにクラインフィールドが展開出来なくなり、一気に弱体化し
た。

(馬鹿な…コンピュータウイルスだと…しかも私達を機能不全に陥る
程の……)

電子戦兵器『ヤシオリ』は試作段階の電子戦兵器で威力はメンタル
モデル単体に限定されるが行動不能にする事ができるコンピュータ
ウイルスだ。

『今だ。ターゲットを確保しろ！』

周りにいた兵士が一斉に銃を構えながら近づき、蒔絵を確保しよう

とする。

クラインフィールドを展開出来なくなったとはいえ油断せず、ハルナとキリシマを破壊してから確保に乗り出す。

(クソ、動かない……このままでは……)

(仮に万全の姿でもこれじゃあ太刀打ち出来ない……このままじゃお荷物じゃないか！)

(守れないのか、私には……？誰でもいいから力を貸してくれ！誰か……助けてくれ！)

その時だった。

突如、前方のバリアントが鈍い爆発音が上がり破壊され、残り2台も瞬時に破壊された。

このことにハルナ達やレムリア軍兵士も驚く。

周囲を見渡すと上空からでかいバズーカを背負ったロボットが飛んできて、ハルナ達の元に着地した。

ロボットは紫色の機体で所々紋章が浮かび上がっていた。

兵士達はブラスタライフルやバズーカを撃ちまくったが、クラインフィールドを展開され無効化された。

また、『ヤシオリ』も試作段階の兵器故に発しか用意しておらず使うことは出来なかった。

そのロボットはハルナ達をやさしく抱えるとすかさず腹部の格納スペースへ収納した。

ハルナ達が困惑していると、

『無事か、お前達。』

「コンゴウ!?何故ここに!?!」

『話は後だ。まずは蹴散らすぞ。』

そう言うのと機体各所に格納してあった機銃を乱射し、兵士を薙ぎ倒していく。

あらかた片付いた後、ロボット……『清八』は背中のパニアを噴かし飛び立った。

「コンゴウ……何故?」

『少し事情があつて、お前達を助けにきた。』

「ねえ、きつき何撃っていたの?」

『少し強めの麻酔弾だ。30分もすれば動けるようになる。』

一方、前線指揮車の車内では…

「くそっ、なんてことだ…!」

作戦は順調に進んでいたが、あのロボットの介入によりターゲットであった刑部蒔絵を取り逃す結果となってしまったのだ。

指揮官は怒りをあらわにしたが一旦落ち着くと、

「…作戦は失敗だ。すぐに倒れている奴らを収容して撤収するぞ。」

指揮官の指示で、後方に待機していた部隊が動き倒れていた兵士達を収容するとそのまま引き上げた。

― 羅號甲板 ―

数時間後、ハルナ達は有坂とアネットと対面していた。

「どうして私達を助けてくれたんだ?」

「どうしてって…助けてって声が聞こえたから。元々危なかったからね。」

「!…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…」

「フ…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…」

「えっと…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…」

「キリシマだ!!」

「ああ、そうだった。と言うか、この姿だとキリシマならぬ『キリクマ』だね。蒔絵ちゃんにも気に入ってくれたし。」

「んな?!」

「…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…」

「硫黄島。群像達の本拠地だって。もちろん羅號も同行するよ。」

今回、羅號のワープ機能はモンタナとの戦闘にて故障してしまい、修理に時間がかかる為そのまま同行することになった。

無論、警戒しながらだが。

「艦長、各員準備良し。いつでも行けます。」

「群像、こちらはOKだ。」

『了解だ。進路は硫黄島に設定。出航する!』

そう言うとい401と羅號は出航した。
彼らは硫黄島へと向かう……………

―東南アジア海域―

ここは東南アジア海域。

霧の東洋艦隊が封鎖を担当する海域である。

外洋に出ようものなら霧に沈められるのがオチだが、今はそうではなかった。

何故ならこの海域の封鎖を担当している霧の東洋艦隊は一隻の戦艦の前に次々と海の藻屑になっていた。

霧の東洋艦隊旗艦のプリンス・オブ・ウェールズは驚愕していた。
今まで人類を海洋から駆逐してきた霧がたつた一隻の戦艦に蹂躪されていることに……………

その戦艦はイタリア戦艦ヴィットリオ・ヴェネトと同じ艦橋と前部に二基、後部二基の三連装砲を搭載していた。

そして特徴的なのは艦首の二本のドリルと何よりその戦艦が速すぎるのだ。

その速度はなんと90ktだ。

驚異的なスピードで霧を翻弄し、砲撃をし霧の艦艇を着実に沈めていた。

無論、霧側も反撃しビームや侵食魚雷を何本も命中させるが、全く効果が無かった。

「駄目です！効果が有りません！」

「くそッ！何なんだあの戦艦は!?!」

プリンス・オブ・ウェールズは苛立ちを隠せなかった。

その戦艦によって東洋艦隊の8割が海の藻屑になっていた。

(くそッ、我らは偉大なるアドミラルティ・コードの用途……こんな不届き者如きに好き勝手されてたまるか!!)

するとプリンス・オブ・ウェールズは切り札を出す。

そう、超重力砲を撃つために船体の上下を展開させ、海を割り敵艦に照準を固定した。

敵戦艦は何を血迷ったのか、なんと艦首をプリンス・オブ・ウェールズの真正面に向けたのだ。

その間にエネルギーのチャージを完了する。

「超重力砲、撃て!!」

ドゴオオオオオ!!

その瞬間、霧の最大の切り札『超重力砲』を放ち、青白い光が敵艦を包み込んだ。

この時、プリンス・オブ・ウェールズはほくそ笑んだ。

超重力砲の直撃を受けて無事であるはずが無い……そう認識していた。

だが……

「なっ……なんだと……」

彼女達は絶句した。

何故なら光が収まった後、そこには傷一つついていない戦艦がいた。あろうことか超重力砲の直撃にも耐えたどころか傷一つ付いてい

ない光景に彼女達は絶望した。

「馬鹿な…あり得ない…こんな事が…」

その時だ。

突如として敵戦艦から駆動音が鳴り響いた後、水しぶきを上げながら中に浮かび上がった。

その事に驚くが、さらにその後度肝を抜かれる事になる。

この戦艦は艦首の二本のドリルに艦底部にもう二本のドリルが付いている戦艦である。

そして数秒間の沈黙があつた後、艦底部の二本のドリルが切り離された。

その後――

ガコン！　ゴオオオオオオオ!!

なんと切り離されたドリルがミサイルのように飛んできたのだ。

驚かない方がおかしい。

彼女達はドリルを撃ち落とそうと弾幕を張ったが、二本のドリルは弾幕をもともせず突き進み、プリンス・オブ・ウェールズ以外の艦に風穴を開け、沈んでしまった。

さらに敵艦の艦尾からミサイルのようなものが飛んできて、霧の駆逐艦を次々沈めた。

気づけば残っているのはプリンス・オブ・ウェールズのみとなっていた。

飛んでいたドリルはそのままウェールズの所に向かった。

「…何なのだ、何なのだお前は…くそッ、くそオオオオオオ!!」

その瞬間、二本のドリルが船体に突き刺さり抉り取った後爆沈した。

プリンス・オブ・ウェールズを撃沈した後、二本のドリルは母艦の方に戻って行き、姿勢を整えると――

ジジジジ！　ガコン！

そのまま磁石のように引っ付き、元通りになった。

この戦艦の名は『インペロ』。

今までインド洋で霧を殲滅していたが、モンタナがやられた事を受

けて東南アジア海域を通って太平洋へと向かっていた。

その道中霧の東洋艦隊と遭遇した為、蹂躪したのだ。

「…弱いな。」

インペロの艦内にかなり広い空間があった。

その空間には無数の機械類が置いてあり、その空間の中心には一人分座れるシートがあった。

そこに一人の少年がいた。

頭部には機械類に接続されたヘッドギアを付けており、艦内にその少年以外の乗組員はいなかった。

そう、このラ級戦艦インペロは試験的に一人での操艦・運用を可能にする『思考制御装置』を搭載していた。

「まあいい、目標は羅號だ…前進!!？」

彼の掛け声に応じてインペロは北東に向かって進んでいた。

その少年は何を思うのか、それを知る術はない。

【第一章 完】

第二章 激動編 明かされた真実 第10話 硫黄島

ーレムリア帝国 帝都ジオラビランスー

執務室にレムリア帝国国家元首『ゼノンⅡタイタニア』とレムリア帝国軍情報局局长『パルサーⅡオーヴェント』がいた。

局長は先の刑部時絵捕獲作戦の結果を国家元首に報告した。無論、作戦は失敗に終わった。

「…刑部時絵が奴らの手に渡りました。いささか厄介かと…」
局長が陳謝をする。

だが当のゼノン国家元首は特に不機嫌そうな表情をしなかった。

「まあそう暗い表情をするな。何も悪いニュースばかりではない。」

「…と、申されますと?」

「ドックより連絡があった。四隻全ての改修が完了したと。」

局長が驚いた表情をする。

つまり、改修中であつた四隻の万能戦艦が実戦に投入できる事を意味していた。

「単艦で霧の方面艦隊を圧倒する戦闘力を持つ万能戦艦が一気に四隻も投入されるのだ。地上人はもちろんのこと、霧の驚く顔を見てみたものだ…」

「それで艦長は誰が?」

ゼノンは四隻の艦長をそれぞれ誰が務めるか局長に伝えた。

「局長、そろそろ下がっていいぞ。しばらくは諜報・工作活動に専念してくれ。」

「はっ。」

そう言うとう局長は執務室から出ていく。

ゼノンは艦長達に通信を開く。

「諸君、万能戦艦の乗り心地はいかがかな?」

『フツ、誠に光栄の極み…』

『へえ、なかなかいいじゃんこの艦。』^{フネ}

『貴方様に賜ったこの艦、必ずや使いこなしてみせます！』
『…悪くないな。』

「諸君らにはこの万能戦艦を用いて世界各地の霧を殲滅してもらう。出し惜しみはするな。無論、補給ポイントを設置する。」
すると艦長の一人が質問する。

『…よろしいのですか、霧を殲滅しても？』

「構わん、兵器としての宿命だ。かつて国力の象徴と謳われた戦艦とやらも航空機の台頭によって無用の長物になった事例がある。兵器がより進化した兵器に取って代わるのは自明の理だからな。」

ゼノンは各艦長にそう説明する。

（まあ、アレが年内に完成する目処が立った以上、霧はお役御免だからな…）

「万能戦艦発進せよ！霧を殲滅するのだ！」

『『『了解！！』』』』

ゼノンは艦長達を鼓舞した後、今度はインペロの艦長とレムリア帝国海軍太平洋艦隊提督に通信を入れた……………

レムリア帝国の特殊ドックから四隻の万能戦艦が出てきた。

一隻目は緑色の船体にシールドマシン状のドリルを持ち、四連装砲を三基すべて前部に集中配置している万能戦艦『インヴェインシブル』

二隻目は下部に三門、上部に二門備えた所謂五連装砲を二基、左右非対称のアンテナ、艦尾にドリルを持つ万能戦艦『ガスコーニユ』

三隻目は真紅の船体に三連装砲、連装砲二基ずつ搭載し、艦尾にロケットエンジンを装備した万能戦艦『ソビエツキー・ソユーズ』

そして四隻目はグレー色の船体に羅號と同口径の連装砲を四基八門備えた万能戦艦『フリードリヒ・デア・グロッツェ』

四隻の万能戦艦はしばらく進んだ後、潜航していく。

いよいよ帝国が動き出した……………

―小笠原諸島近海―

一方、羅號とイ401の二隻は蒼き鋼の拠点硫黄島に迫っていた。硫黄島からの管制により、二隻はそれぞれ別のドックに入っている。

しばらく進んだ後、二隻共浮上し船体はアームで固定され入港が完了した。

「艦長、本艦及びイ401入港完了。港湾システムとのリンク、オールグリーン。」

「ふう、これで一安心だな。」

各クルーが一息つく中、イオナが異変に気付く。

「どうしたイオナ？」

「…妙なのがいる。」

「妙なの？」

イオナは両艦のモニターに映像を映す。するとドックに赤い船体の軍艦がいた。

その光景に皆驚愕する。

「なっ!？」

「重巡タカオ…」

「いつの間にドックに入り込んでやがったのか!？」

「先回りされたのか…どうするか!？」

突然の事に皆困惑する中、群像と有坂は落ち着いた表情で注視する。

「重巡タカオ…消息不明だったが、貴様らに拿捕されていたとは…!」「知らない。」

イオナがすかさず否定する。

「じゃあ、なんでここに…?」

「群像、まさかとは思いますが留守の間に基地が制圧された…なんて事はないよな?」

「…イオナ、ヒュウガは健在なんだろう?」

「ヒュウガ…？大戦艦ヒュウガか？」

イオナはサークルを展開し確認する。

「…いる。下まで来てる。」

「ヒュウガが制圧されていないのなら大丈夫だ。上陸して事情を聞いた方が早い。」

群像の意見を受けて皆艦フネから降りてくる。

すると突然卵型の何かが現れた。

『お帰りなさいませ、艦長。遅いご帰還でした。』

「ヒュウガ、ご苦勞様。半年間このドックを守ってくれた。ありがとう。」

群像はヒュウガにお礼を言う。

『いえ、これも自身の課した役目ですから…：ハアアア!』

ヒュウガはイオナの方を向くと、声を荒げる。

「い…い…：イオナ姉様くくくく??」

なんと卵が開き中から女の人が飛び出してきた。

突然の事に皆驚く中、ヒュウガはイオナに抱きつきそのまま押し倒す。

「…何これ？」

「ヒュウガなのか…？」

イオナはヒュウガから離れようとするが、ヒュウガが激しく抱きつき離れる事が出来ない。

「思えば一年前…：姉様に次々と魚雷を叩き込まれたあの日よりこの大戦艦ヒュウガ、お姉様無しでは生きていけぬ身体に…：ああどうにかなっ…てしま…いそう…」

「どうにかなっ…てしまったのですね。」

「本当にヒュウガのようですね…」

「そのようだな…」

ヒュウガは一旦落ち着き、群像達の方に向いた。

「貴方達人間の思考を理解するにはこうするのが良いと思…い当た…りま…して…：身体を創造クリエイトしました。」

「メンタルモデル “ヒュウガ” か…」

「ええ、以後お見知り置きを……ハッ！身体といえ……」
そう言うとヒュウガはイオナのセーラー服を捲り上げる。

彼女は何処かに怪我をしてないか確認する名目でイオナの身体をジロジロ見たり、スカートを下げようとしたがイオナに蹴っ飛ばされ壁に激突した。

「ヒュウガ、侵食魚雷の補給と超重力砲の修理を。次の出航に向けて完全修復したい。」

「い……イエッサー……」

「ヒュウガ、貴官が401に後ろ盾していたとはな……」

「大戦艦ハルナ、キリシマそれにコンゴウ、重巡マヤまで……事情は確認している。貴方達が同行してくるとは、面白い事になっているわね。」

「……成り行きだ。」

するとヒュウガは蒔絵を見る。

「(デザインチャイルド……) その子の為なのね。」

凶星だったのか、ハルナは少し驚く。

「賑やかになっていいわ。歓迎するわよ。同じ大戦艦のよしみであるものね。」

ヒュウガは少し微笑む。

「ヒュウガ！お前こそ人類に与するとはなんだ！」

キリシマが突つかかるが、コンゴウが止める。

「よせキリシマ、我々も負けた以上何を言っても負け犬の遠吠えだ。」

「んな!？」

「……それよりアレはどうゆう事だ？」

「ああ、アレは……」

ヒュウガは重巡タカオの船体の方を向く。

そこには一人の少女が立っていた。

「お久しぶりね、401クルーの皆さん。」

タカオは高圧的な態度で接するが、群像がタカオを凝視すると、

「ハッ!?群像様!？」

まるで恋する乙女のような反応をする。

「あ……どちら様で……ズガガガガガガ!!うわわ!思い出す!今

思い出します!」

「フン、仕方ない。」

そう言うのとタカオは服装を変え、白いワンピース姿になる。

「これでどうよ。貴方達に会う為に先回りしてここを占拠していたのよ。」

タカオはそう言うが、

「いいや、返り討ちに遭って捕まっていたのよ貴方は。」

「そうなんだ…」

ヒユウガの説明にいおりは苦笑する。

すると群像が質問する。

「俺達に会うだと?」

タカオは少しドキツとして、

「えっ、ええ、そうよ。」

と、肯定する。

そしてイオナを凝視すると拗ねたかのようにそっぽを向く。

「用件を伺おう、重巡タカオ。」

「ハッ!用件:…?え、えっと…私の用件は…」

群像に質問されたタカオは動揺して顔を赤らめながらもじもじする。
る。

そんな中、ヒユウガは何かを企んでいた。

(さあ、言えタカオ!事前に二人で立てた作戦通り『私の艦長になって下さい??』と!そうしてその男を連れ去るのだ!そうすれば…イオナ姉様は晴れて私だけの…ジュルリ…私だけのものよ???)

ヒユウガの口元から涎が出る。

彼女の脳内には産まれたままの姿で抱き合うイオナとヒユウガのビジョンが……

(※ヒユウガの身勝手な妄想です。)

するとアネットが若干引き気味な表情をする。

「どうした…?」

「いや、あの…ヒユウガさんから何か邪な気配が……」

(…絶対良からぬ事を考えているな。)

コンゴウがそう思っていると、タカオが口を開く。

「私の…わ、わた…（さあ、言えタカオ！）渡して貰おうか！（言え！
〃千早群像を渡せ！〃と！）ち…ち…：…振動弾頭とそのデータを!!」
全然違う要求にヒュウガは驚き、タカオはハツと口元を手で押さえ
る。

「テメエ…やっぱりそれが目的か！」

「タカオ！振動弾頭を渡す訳には…」

その瞬間、ヒュウガが目にも止まらぬスピードでタカオに詰め寄
る。

「お前、ばつかじゃねえの!?計画と違うじゃん！何だよ今の!」

「え…だって、そんな告白みたいな事いきなりは…」

「いきなり押しかけてきて今更恥じらってんじやないわよ！」

「お…乙女にも色々あるのよ…」

「〃乙女プラグイン〃なんか実装してんじやねーよコラツ！」

すると二人はクラインフィールドを展開し、お互いのフィールドが
ぶつかり合い火花を散らしていた。

「あーうるさいな！こつちこそ何してたのよ!?こんなところで管理人
!?あんたこそ大戦艦としての誇りはどこ言ったのよ!」

「うっさい！お前に何が分かる!?あのイオナ姉様の軍神の様な神々し
さ…??避けても避けても次々と当ててくる圧倒的な攻撃力…??ああ、
イオナ姉様く足耐え申し上げておりますく??」

ヒュウガの脳内にかなり思い出補正が掛かった回想が浮かぶ。

「あんたの告白なんか聞いちゃいけないわよ！」

そんな中、キリシマが水を刺す。

「おい。」

「何よ!」

「みんな行つたぞ。」

「イオナ姉様!」

「群像様!」

二人が壮絶な喧嘩をしている間、群像達はドックを後にしていた。
「つて、それはそれとして…あんた識別反応ではキリシマだけど…」

「わわわ、訳は聞くな…」

「マリアナ諸島沖」

「ここはマリアナ諸島沖。」

そこには万能戦艦『インペロ』が待機していた。

待機している所、右舷の方向に「何か」が接近してきた。

接近してきたのは七隻の潜水艦だ。

内六隻は二基四門の40cm連装砲を備え重厚な装甲を持つ潜水艦『B型潜水艦』

そして最後の一隻はB型潜水艦より重厚な装甲を持ち、全長330mという原子力空母並の大きさを誇る潜水艦『C型潜水艦』だ。

尚、この七隻以外にも全長150mの潜水艦『A型潜水艦』が16隻、そして最新鋭潜水艦『D型潜水艦』が一隻待機していた。

合流すると計26隻の艦隊は蒼き鋼の拠点『硫黄島』に進路を定め進軍する。

激闘の日も近い……………

第11話 帝国の事情

羅號出航から遡る事1ヶ月…

レムリア帝国国家元首ゼノンⅡタイタニアは海の中にいた。

否、正確には海の中にいる感覚だった。

何かの気配を察知しその方向を向くとそこには水上艦がいた。

彼はその方向に手をかざすと魚雷が放たれ、そのまま命中する。

すると今度は潜水艦が接近してきて魚雷を放つ。

魚雷は彼の元に向かってくるが、慌てる様子は無くまるで魚になっ

たかのように魚雷を回避し、魚雷で返り討ちにする。

一通りの動作テストを終えると彼の意識は現実に戻される。

そう、彼が今まで見ていたのはシミュレーション。

だが、そこに操縦桿とかは無く周りに機械類とそれに接続されたヘッドギアが付けられており、ヘッドギアが外れると彼は立ち上がる。

そばには如何にも科学者と呼べる格好の男がいた。

「どうですか?『思考制御装置』を使ってみた感想は?まるで自分が艦になった感覚が味わえますが…」

「ふむ…このシステムを用いれば一人で艦を制御出来るか。」

「はい、しかも反応速度はメンタルモデル並です。」

「作業は進んでいるのか?」

「すでに万能戦艦『インペロ』に取り付けており、後は調整を残すばかりとなっています。」

「なるほど…すると『インペロ』の出撃は既に可能なのか?」

「パイロットに合わせた調整に少々時間がかかります。ご存知の様にこのシステムは個人の脳波の特性に合わせる必要があります。」

「ではパイロットを…」

ゼノンがそう言いかけると向こうに誰かが見える。

それはゼノンと瓜二つの少年で違うところはマントを羽織っていない事と、ゼノン本人と比べて雰囲気的にやや幼い事だ。

「父上、その役目僕にやらせてください!」

少年はそう懇願する。

「ツヴァイ、私のことを父上と呼んでいいと言った覚えは無いぞ。」

「でも……」

「ツヴァイ、お前は私の息子では無く複製品レプリカ……私の肉体に万が一の事があつた時のための予備スペアに過ぎない。」

「そんな……僕は父上のお役に立ちたいと願うことも許されないので何か？」

「お前はただ存在してればいい。それがお前の課せられた使命だ。」

ゼノンは少年……ツヴァイを冷たく突き離す。

ツヴァイがショックを受けていると、科学者……『ラヴナードツペラー』が待ったをかける。

「お待ちください、ゼノン様！ツヴァイ様をインペロのパイロットにしていただけなのであればインペロは明日にでも出航可能です。」

「……理由を聞こう。」

「先程のシミュレーションの通り、この思考制御装置はゼノン様の脳波に合わせて調整されています。これを他人に合わせるのに時間が掛かります。ですが、ツヴァイ様であれば遺伝形質的にはゼノン様と同一の個体……思考波の形状は極めて近く、わずかな微調整だけで出撃が可能となるでしょう。」

科学者の提案にゼノンはしばらく考え……

「……分かった。ツヴァイ、お前をインペロのパイロットに任命する。任命された以上、使命を果たせ！」

「了解！」

そして現在に戻る……

ツヴァイはあの時の光景を思い出していた。

今の彼の使命は帝国に離反した万能戦艦『羅號』の破壊。

(父上の役に立つ為にも……羅號を必ず破壊する！)

そう決意した彼は、自分の存在意義を確立する為に艦隊に随伴する。

進路は勿論硫黄島だ。

そして硫黄島攻略艦隊に潜水隊がいる。

潜水隊はD型潜水艦『ティアマト』率いる第一潜水隊と万能戦艦『インペロ』の指揮下に入った第二潜水隊に分かれている。

第一潜水隊旗艦の『ティアマト』は乗組員の休憩を兼ねて現在浮上している。

最新鋭潜水艦のD型潜水艦は作戦用途によって自由にカスタマイズが可能であり、中でもティアマトは試作型拡張ユニットを搭載している。

D型潜水艦は全長170mとA型潜水艦より大きいティアマトは全長220mとさらに大きく、後部にVLS等を搭載した武装ユニットと艦の各所に計4枚の翼型外部電磁推進体を備えた特殊推進・操艦ユニットを搭載している。

そんなティアマトの甲板に一人の男と二人の少女がいた。

彼の名は『サナクllターコイド』。

ティアマトの艦長であり、第一潜水隊を束ねる指揮官である。

彼の潜水艦乗りとしての腕は折り紙付きであり、数多くの霧の艦を沈めてきた優秀なサブマリナーである。

その為、彼の乗艦『ティアマト』に拡張ユニットを搭載する事を許された。

そして二人の少女の内の一人は前髪を切り揃えた黒髪に細いツイントールを垂らし赤いレインコートを羽織った少女：『ズイカク』と霧の重巡タカオを幼くしたような容姿の少女：『アタゴ』がいた。

三人はズイカクが釣り上げた魚を七輪で焼いて食べていた。

「うまいな。」

「でしょ？・特に秋刀魚の塩焼きは！」

ズイカクがそう自慢する。

何故霧のメンタルモデルがティアマトに乗艦しているのかというと、それは数日前に遡る。

当時ズイカクとアタゴは霧の東洋方面第二巡航艦隊に所属していたが万能戦艦モンタナの襲撃により艦隊は壊滅しズイカク、アタゴも沈んでしまった。

幸いにもメンタルモデルだけは脱出できたのでしばらくの間救助

が来るまで海底で待っていた。

そこに偶然通りかかったのがレムリア帝国海軍最新鋭潜水艦『ティアマト』だった。

拾った当初はこちらを憎んでいる懸念があつたが、当の二人にそんな気は無くすぐに打ち解けていった。

特にズイカクの魚料理が美味かつたので浮上した際に彼女が釣り上げた魚を焼いて食べている。

基本的に潜水艦の食事は遺伝子改良を施した食品を加工したもの（缶詰めなど）を食べている。

彼はたまに食べれる魚料理や和菓子等をいたく気に入っている。

レムリア帝国は芸術や食文化がそれほど豊かではない為、そういうのは地上人に作らせている。

霧との戦争において芸術家や職人など戦闘に関係の無い人達が真っ先に切り捨てられる所謂『棄民政策』により居場所を失った芸術家・職人達を帝国が保護し、その対価として芸術や食文化等を提供しているのだ。

無論、彼らの環境も整ってある。

三人が魚料理を堪能していると、副長から通信が入る。

「艦長、そろそろ……」

「ああ、分かった。お前らそろそろ潜るから艦内に戻るぞ。」

そう言うと三人はハッチから艦内に入り、ティアマトは潜航する。

もうすぐ硫黄島の戦いが始まる………